

肥後國之神
乃鑄立物以
相徵也
追而燒其外
燒其赤脉



水
火
風
雷
電
土
金
木
火
水
風
雷
電
土
金
木

表紙のバック絵解説

幻の装飾文様　—鍋田横穴墓27号—

久留米藩主であった矢野一貞は、嘉永2（1849）年山鹿を訪れ、この鍋田横穴を見物しました。

江戸時代のことと、今の様に文化財が云々される時代ではありませんでしたが、矢野一貞は、余程興味をそられたのか、横穴の入り口壁面に描かれた装飾文様をスケッチしたのです。

彼は、この数年後に「筑後将軍談」という本を著し、そのなかに、このスケッチを収めました。

この本のお陰で、我々は、現在崩壊している27号横穴墓の右壁面に、かつて描かれていた幻の装飾文様の有様を、時を越えて知ることができたのです。

このことは、27号右壁面の崩落の時期を限定でき、その後の遺跡の保存対策にも示唆を与えてくれました。

古代の森（山鹿地区）屋外展示場には、このスケッチをもとに復元された27号墓の装飾文様の複製品が展示されています。

裝飾古墳

よみがえる古代

—1993—

熊本県立裝飾古墳館

図1 塚坊主古墳（国指定史跡）



塚坊主古墳墳丘部



同石室内部（東方より）

口絵2 塚坊主古墳（国指定史跡）



塚坊主古墳の石屋形奥壁の装飾文様



▲同石屋形左壁の装飾文様

同石屋形右壁の装飾文様▶



図絵3 オブサン古墳（県指定史跡）



オブサン古墳全景

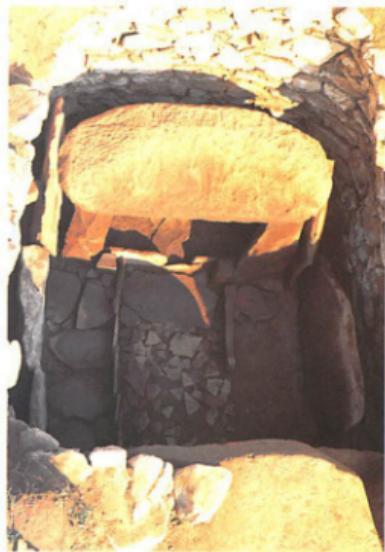


出土遺物の一部



装飾文様の施された仕切り石

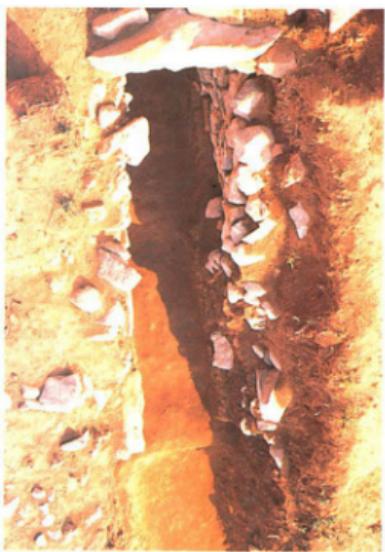
口絵4 横山古墳



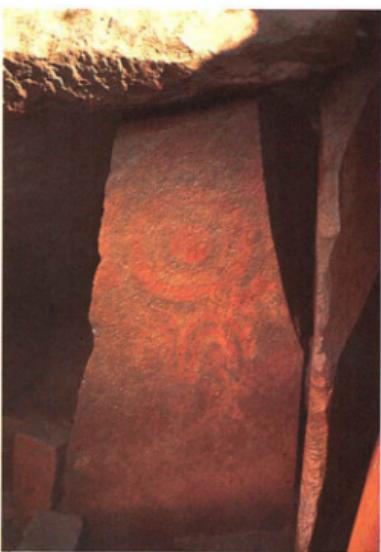
横山古墳石室部



同石屋形左側袖石の装飾文様



同羨道部



同石屋形右側袖石の装飾文様

口絵 5 田中城下横穴群

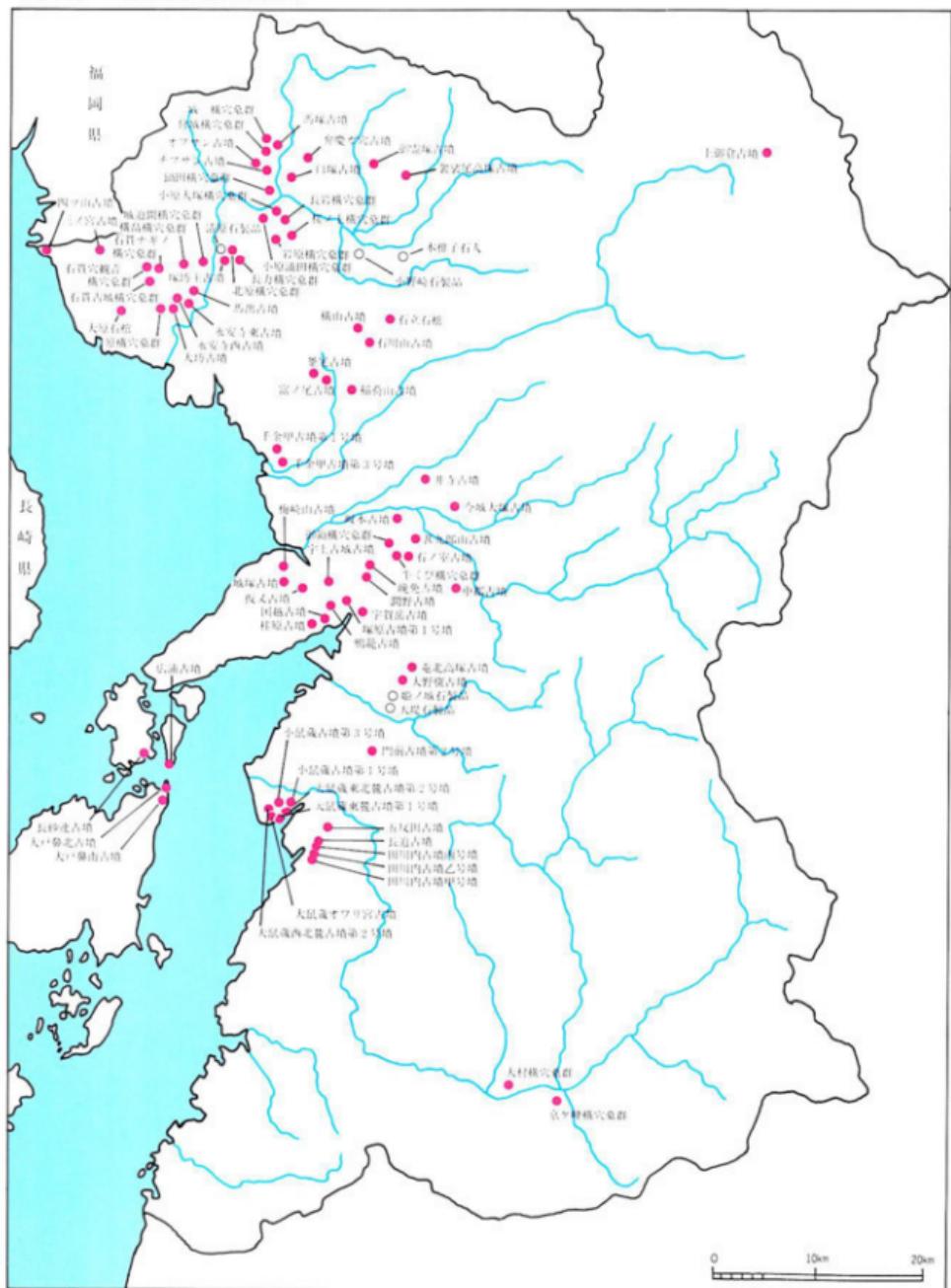


田中城下横穴群（1群）遠景



同上装飾文様（三角文）

熊本県の主要装飾古墳分布図



はじめに

熊本県立装飾古墳館のオープンにさいして、装飾古墳展を企画しました。本展においては最近、その内容が確認された肥後古代の森菊水地区の塚坊主古墳を中心に、同山鹿地区のオブサン古墳や新発見の小川町楫屋林古墳と三加和町田中城下横穴墓群、九州自動車道建設のとき解体され、以来収蔵庫に眠っていた植木町の横山古墳などの装飾文様を主として紹介しました。

ちなみに、塚坊主古墳の文様構成が三色で塗り分けた連続三角文と円文であることと関連して、その文様ときわめて親近する玉名市大坊古墳をあわせて展示しました。三角文は装飾文様として一般に使われる文様ですが、菊池川流域にはとくに多用されております。その濃密な分布の理由は何か、また、三角文の起りはどうかなどいくつかの問題がありますが、今回はその問題提起の意味をこめました。

なお、展示を見ていただく上でご参考になればと思い、装飾古墳についての概説や文様の解説、分布等についての資料をそえました。

本展の実施にあたっては、九州歴史資料館、山鹿市立博物館、城南町歴史民俗資料館、岩戸山歴史資料館、菊池市教育委員会、県立鹿本高等学校、県立菊池高等学校の各位にとくにお世話になりました。あつくお礼を申し上げます。

平成4年4月15日

熊本県立装飾古墳館館長 原 口 長 之

装飾古墳展目次

見返し表紙

カラ一口絵（塚坊主古墳・オブサン古墳・横山古墳他）

熊本県の主要装飾古墳分布図

はじめに（館長 原口長之）

目次

1. 最近発見され話題をよんだ装飾古墳

- (1) 塚坊主古墳の装飾 (桑原 憲彰) 1
(2) 田中城下横穴墓群の装飾
(3) オブサン古墳の装飾
(4) 檜屋林古墳の装飾
(5) 横山古墳の装飾

2. 熊本の装飾古墳の概略 (原口 長之) 17

- (1) 装飾古墳とは
(2) 菊池川流域の装飾古墳
(3) 特異な装飾文様

3. 集中的分布の背景をさぐる (中村幸史郎) 25

- (1) 全国から見た熊本の装飾
(2) 県下の装飾事始め
(3) 彩色古墳の開花とその意味
(4) 横穴墓の装飾と意義
(5) 石人・石馬造立の背景

4. 主な装飾文様の解説 (原口 長之) 30

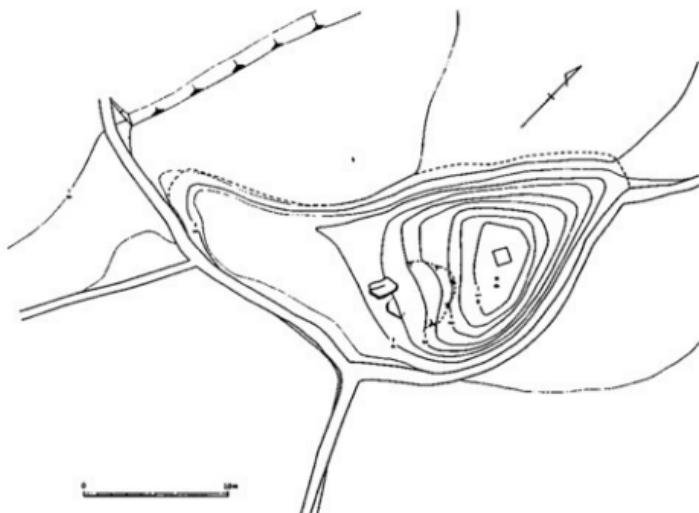
5. 開館記念展出品一覧 (桑原 憲彰) 37

各展示棚の解説パネル内容その他関連図版

1. 最近発見され話題をよんだ装飾古墳

熊本県立装飾古墳館学芸課長 桑原憲彰

(1) 塚坊主古墳（玉名郡菊水町大字江田字清水原所在）



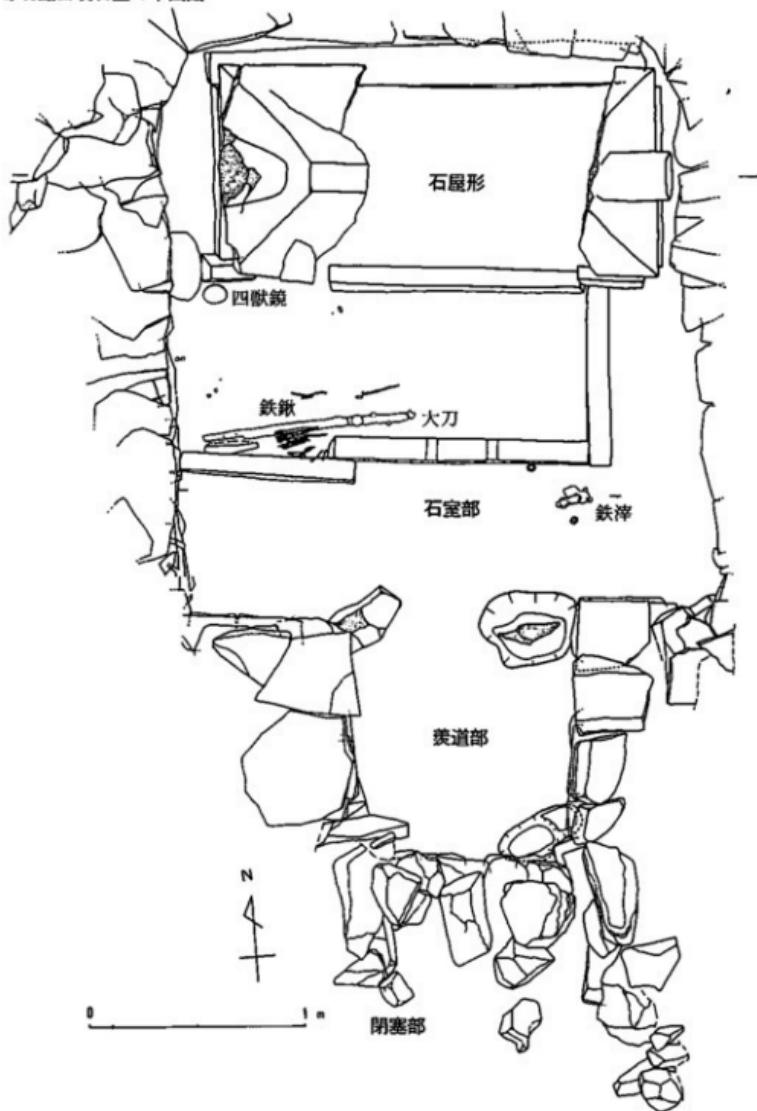
墳丘測量図

調査の沿革 戦時中に、京都大学が発掘調査を行っている。その直前に盗掘が行われたからだという。この時、石屋形の奥壁に三角の装飾があると言っていたが、綿密な調査ではなかったので、はっきりしなかった。

その後、昭和56年、県文化課で当古墳の周溝調査を行い、築造当時の墳丘のプランが確認され、その結果は、「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」として県の報告書にまとめられた。

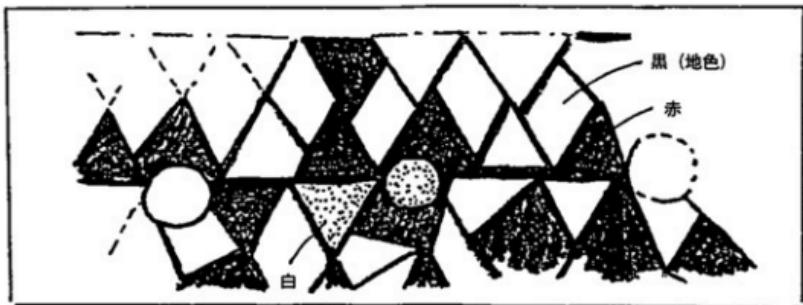
石室 石室に羨道のつく单室墳。石室の床面は、奥行き260cm、幅250cmのほぼ正方形をなす。羨道は、奥行き190cm、幅90cmで、後円部から見て左くびれ部に向かって開口し、人頭大の割り石による閉塞部が残る。

塚坊主古墳石室の平面図



奥壁に沿って、幅195cm、奥行き100cmの寄棟の屋根を持つ石屋形が設けられている。手前には、この石屋形に沿って、追葬時のものと思われる屍床が並ぶ。石室の天井の高さは、崩壊しているため不明である。

新発見の装飾文様 文様が描かれている場所は、石屋形の奥壁と左右の側



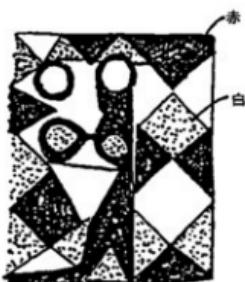
石屋形奥壁の装飾文様（見取り図）

壁部である。文様のモチーフは三角文であるが、連続三角文を主体に菱形や大きさの異なる三角文を配してアンバランスを強調しながら、全体的にみるとバランスのとれた調和を感じる不思議な文様である。

文様の保存状況も大変良好であり、装飾古墳の発見としては、昭和52年の小田良古墳（三角町）に次ぐものであろう。彩色は、赤、白が主体となっているが、「黒色の使用もあるのでは」という専門の先生の指摘もあるので、顔料分析等慎重を期したい。

チブサン古墳（山鹿市）、大坊古墳（玉名市）の文様に似ており、特に大坊古墳の文様とは酷似する。地理的に見て、中間地点の菊水町に類似する文様をもつ古墳が発見

されたことは、菊池川流域に、同じ文化を共有する勢力が存在したことを示



山鹿市チブサン古墳



類似する装飾文様

唆するものであろう。

遺物（副葬品）について 過去の盗掘と戦時中の京都大学の調査により、遺物の発見は無理であろうと考えていたが、予想に反してかなりの遺物の検出があった。

〔出土遺物一覧〕

古墳時代の遺物

○装身具

金環（一対）、銀環（一対）

玉類 = 硝子玉（小玉） 約30個

鏡 = 四獸鏡（仿製鏡） 直径10cm、厚さ2mm、平縁

（追葬用屍床の枕元より出土）

○馬具・武具類

馬具類 = 韶・留め金具・不明鉄片等

杏葉 2個（一对をなすものではない）



塚坊主古墳から出土した四獸鏡



同古墳出土の鐵刀・鐵鎌類

武具類 = 鉄鎌（尖り根式）10数本
刀子2本
鉄刀一振（長さ100cm）
その他

○祭祀用儀器

須恵器 = 破片若干（昭和57年調査では、かなり出土）
○墳丘装飾 = 円筒埴輪破片、若干（昭和57年調査で、人物埴輪の腕部出土）
○その他 = 床面より鉄滓

中世の遺物

○中世墳墓関係 = 火葬骨、石造物相輪部、青磁器片、土師質土器片数点
古墳の今後の復元整備について 今回の調査の結果、遺物等から、当古墳は6世紀初頭の築造であることが推定された。清原古墳群のなかでは、5世紀後半の築造と推定される江田船山古墳に次ぐ一世代後の古墳であり、同系豪族の墳墓として、同一範囲内での保存整備が計られるべきものであろう。

今度の調査による良好な状態での装飾文様の発見により、保存整備工事はさらに急務になったと考えられる。

今後の整備計画としては、今回の調査結果を踏まえ、平成3年度に基本設計と実施設計をすすめ、4年度に整備着工の予定である。

当古墳は、肥後古代の森（菊水地区）の指定地区内に在り、また、国指定の史跡でもある。保存整備に当たっては、文化庁の指導に沿って「文化財の保存と活用」の両面からの整備を計って行く必要がある。

(2) 田中城下横穴墓群（玉名郡三加和町大字春富字和仁所在）

三加和町の田中城下横穴墓群は、県指定史跡「田中城」の周囲岩壁に残る横穴墓群で2群からなる。1群は田中城南側にあり6基、2群は岩地蔵を北限とする一群で5基を数え、合計11基が確認されている。

この11基のなかの2基に、沈線で描かれた装飾文がある。この2基は、平成3年の12月、町史編纂事業の実測調査中に発見されたものである。

装飾をもつ横穴墓は、田中城下横穴墓群の南の1群のなかの一基で、高さ約5mの岸壁に所在する。入り口部および手前右半分は崩壊しており、外部

から壁面に沿って内部の状況がよくわかる。この横穴墓は、奥行が3.54m、横幅が2.45mで、奥壁に沿って一段高くゴンドラ型の船縁をもつ屍床が設けられている。屍床には、両側に一個ずつ丸く彫りこんだ枕が造り付けられている。左の屍床は、入り口の方の3分の2位が、左壁とともに崩落している。

装飾文様は、奥屍床の前面と奥壁および墓室の右側壁等に、線刻で描かれている。基本的パターンは、菱垣状の文様で、菱形の真ん中を横に直線が貫いて走り、三角文をつくり出している。崩落した左側壁にも、同様の文様が描かれていたのであろう。この文様は、鍋田横穴墓群52号横穴墓の線刻文様によく似ていることから、その関連性が注目される。

また、辛うじて崩壊を免れた右側壁には、崖の上部から大きなひびが縦に走り、大崩落の危険がさし迫っている。保存工事は無理と思われる所以、早急な実測による記録保存が必要であろう。

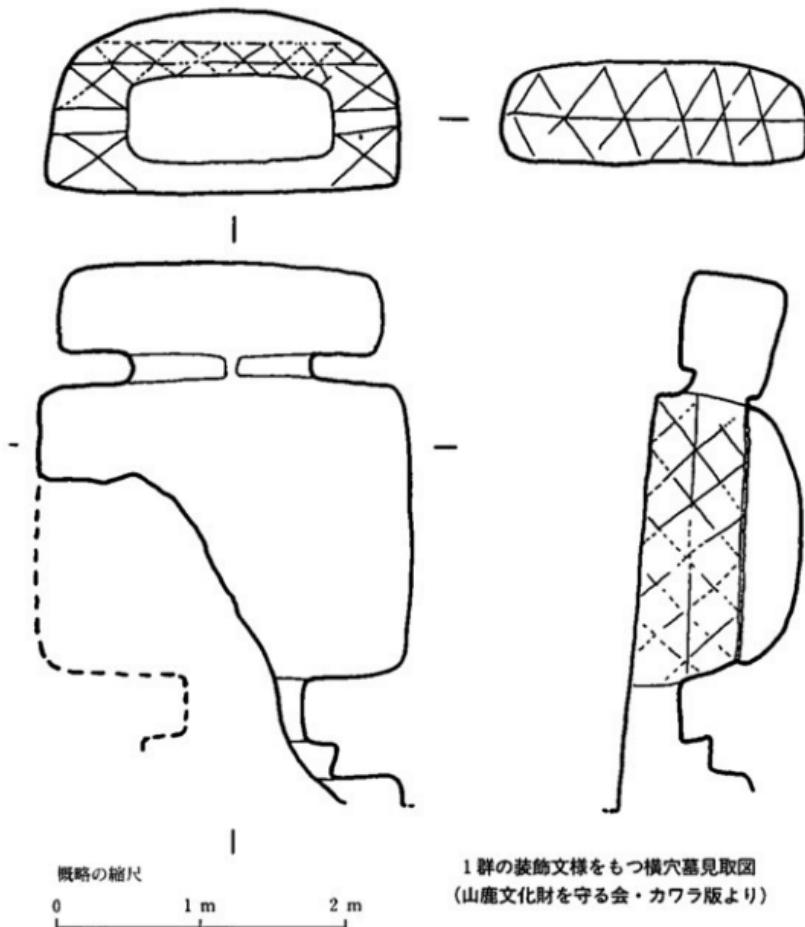
別の装飾文様をもつ横穴墓は、岩地蔵を北限とする2群のなかの一基で、側壁面の一部に斜線状の文様が残る。壁面の風化が激しいが、元来全面に線刻の装飾が施されていたのであろうか。またこの2群のなかには、内部から



田中城下横穴墓群（1群）の状況



装飾文様をもつ横穴墓（1群）



概略の縮尺

0 1 m 2 m

1群の装饰文様をもつ横穴墓見取図
(山鹿文化財を守る会・カワラ版より)

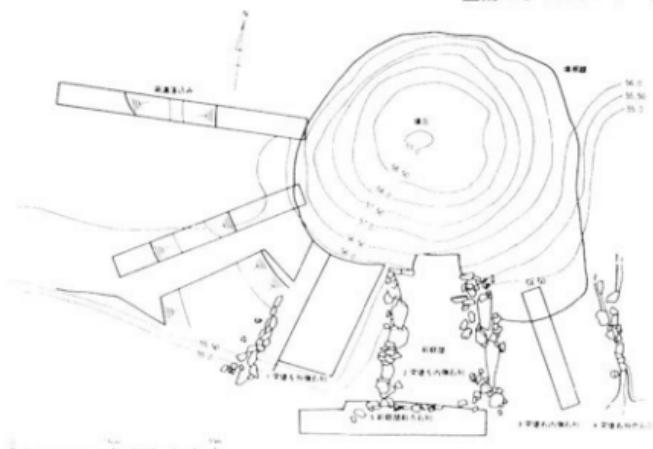
見た屋根の棟や稜線、軒の線が刻まれている横穴墓がある。それ自体は珍しいことではないが、一般にこれらは、彫り込まれたものが多い中にあって、この場合は内部に向かって大きく造り出されており、他にあまり例を見ない珍しいものである。

(3) オブサン古墳（県指定史跡 山鹿市大字城字西福寺所在）

現況 熊本県が他県に誇り得る文化財は、目鑑橋と装飾古墳である。装飾古墳は全国で約484例が報告されているが、その内186例(平成4年3月31日現在)は熊本県内に所在する。186例の内訳は、石棺・石室が67基、横穴墓が119基である。また、それらの過半数が菊池川流域に集中している。



整備のなったオブサン古墳



修復前の墳丘実測図

当オブサン古墳の所在する平小城台地には、約200m 東にチブサン古墳（国指定史跡）、さらに、台地東端の岩野川に接する岩壁には鍋田横穴墓群（国指定）、付城横穴墓群（県指定）、城横穴墓群（県指定）、その東に臼塚古墳（山鹿市指定）、対岸の熊入台地西端には弁慶が穴古墳（国指定）等が所在し、装飾古墳的一大集積地となっている。

このため、オブサン古墳が、装飾古墳である可能性は以前から論ぜられており、特に、玄門右袖石の小口部や奥壁中央部に見られる線刻に、装飾の可能性ありと考えられてきた。

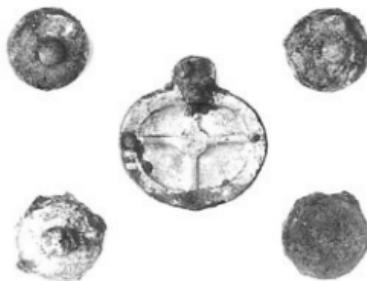
新発見の装飾文様 前庭部の発掘作業中に、朱の施された凝灰岩製の板石が発見された。彩色による赤であることは明らかであるが、全面に朱を塗布したものか、文様を描いたものか不明であった。

しかし、その後の奥室部の調査で、装飾文様の描かれた、左仕切り石の残欠が発見されるにおよび、先の彩色の板石が同一個体の一部であることが判明した。この結果、描かれた文様は、朱による連続三角文様（次ページ）であることが確認された。

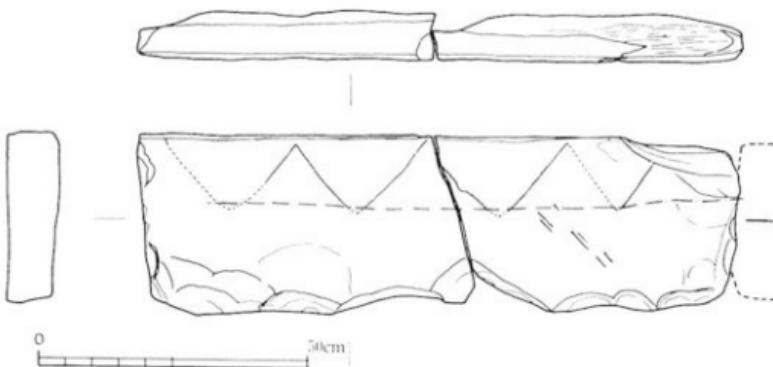
文様の描かれた板石は、長さが約111cm、最大幅が約34cm、（地上露出部12.5cm、埋め込み部21.5cm）厚さが約9cm の整形された凝灰岩の板石である。

文様は、通路側の床面より露出した12.5cm の間に、四つの二等辺三角形が底辺を上に連続して描かれている。各々の三角形の底辺は約25cm、高さは約14cm である。

地下に埋め込まれた部分の彩色は認められず、石材の整形も粗い。



オブサン古墳の出土遺物（馬貝類）



仕切り石に描かれた連続三角文

板石は、丁度真中から割られており、左半分が原位置に残り、右半分が前庭部より発見された。持出された時期は明らかでないが、西南戦争時に掩体の材料として持ち出された可能性が強い。

奥室の仕切り石は、左仕切り石の手前半分を除いてすべて外部に持出されており、床面には、抜取り穴が残るのみである。石室外に持出された右の仕切り石にも同様の文様が施されていたものと思われる。

この外、装飾文様は、奥室の奥壁をなす一枚石の中央左寄りにも、朱による小型の鞠もしくは樋が描かれているのが確認できた。ただし、これらの文様は、水洗い、ライティングによる最高の条件下で、壁面の小粒突出部に点として残る朱を辿った結果判定できたもので、肉眼による現時点での判別は不可能であろう。従って装飾文様が、小型の鞠か樋であるかの区別も困難であ



オブサン古墳の出土遺物（鉄鎌他）

る。

この外、玄室内の玄門右袖石と奥室の奥壁上部には、従来より、文様状の沈線が認められ、装飾文様の可能性ありと言わされてきた。

このため、全面を拓本に採り、沈線を綿密に観察し検討したが、何の統一性や規格性もみられず、後世のいたずらであろうと判定した。

玄門右袖石には、正面と小口部に縦横に走る数状の沈線が認められる。石材は、他に較べ軟弱で傷つきやすく、しかも、通路に面しており落書のしやすい場所にある。後世、先の尖った釘状のもので傷を入れたものと思われる。

玄室奥壁の数状の沈線は、石屋形の一端を支えるため奥壁に刻まれた、柄用溝の下方部分に認められる。

「線刻による連続三角文では」と注目されてきたが、沈線を施す際の方向や、力の強弱、形象性の有無等考え合わせると、これも築造当初の装飾とは認め難い。

調査当時、石屋形は失われていたが、石屋形の屋根部が存在していればこの沈線は施し難い。柄用溝の縁まで引搔線が伸びていること等も、後世のいたずらであることを裏付けるものであろう。

(4) 檵屋林古墳(かんじやばやし)（下益城郡小川町大字東小川字下鞍掛所在）

この古墳は1号墳と2号墳からなり、平成元年の4月に、2号墳から線刻による装飾文様が発見された。

発見の動機は、ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財の踏査・試掘時であった。当古墳が、ゴルフ場新設の敷地内に位置しており、その保存を図るために県文化課が調査を実施したのである。

1号、2号墳とも横穴式石室をもつ古墳であるが、現在石材が抜かれたり倒れたりしており、過去に相当の破壊を受けていることがわかる。

とくに、2号墳の石材には、近世に矢を入れて割ろうとした痕跡が残っており、当時、かなりの石材が搬出された事実を物語っている。

1号墳の内部主体は横穴式石室で、現在は羨門部、天井石、側石の一部を失っている。墳丘は確認できないが、部分的に残存している可能性もある。周溝部は殆ど削平されているが、深さ3~5cmの底部のみが若干残っていた。

遺物は、過去に石室から金銅製の耳環四個が出土しているが、現存してい



柏原林 2号墳の側壁の装飾拓影

るのは二個のみである。

2号墳も主体部は横穴式石室であるが、羨門部や側石の一部、天井石を失っている。墳丘、周溝の状況や、過去の出土遺物等は判らない。

この古墳も、現在破壊を受け、側石と思われる石材が倒れているが、線刻はこの側石に見られる。石の大きさは、 $2.08m \times 1.7m$ で、その上部に装飾文様が刻まれている。

調査担当者によると、この線刻は「楯」もしくは「韌」と推定している。しかし、見方によっては、横穴式石室のプランや家屋を表しているようにも見えるし、にわかには断じがたいので、今後の検討を待ちたい。

(5) 横山古墳 (鹿本郡植木町大字有泉字横山)

古墳の概略 横山古墳は、全長40m、前方部前端の幅19m、高さ3m、後円部直径29m、高さ5m、こじんまりとした前方後円墳である。おびただしい遺物と装飾文様が発見された。発見された装飾は、他に類例の少ない双脚輪状文（二つの脚をもった輪のような文様）である。

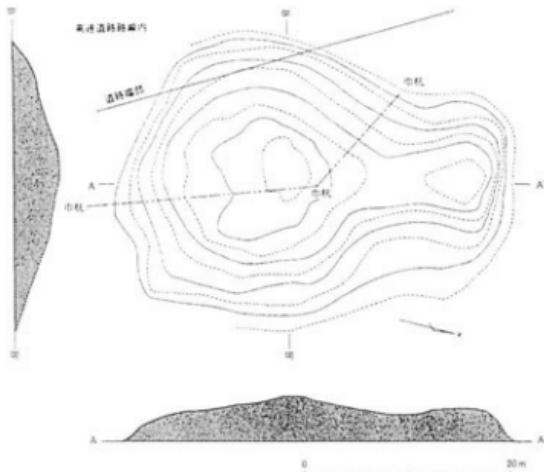
玄室は3.8m、隅丸の方形で、約11mの長い羨道をもつ。石灰岩や安山岩で組みあげた側壁の石組みは粗雑であるが、正面には石屋形があり、中央の通

路をはさんで板石を区切って作った屍床があり、石屋形前には灯明台を設けている。装飾は石屋形の軒縁、袖石、屍床の仕切石に赤、白、青の顔料で双脚輪状文、三角文、円文が描かれている。袖石以外の遺存状況は良くない。遺物は玉、鐵鍼、刀子、馬具、須恵器など約二百数十点が石室内より出土した。当古墳は発掘調査後九州自動車道建設のため、取り壊されたが、石材等は保存してあったため、平成4年度、当装飾古墳館近くに移転復元の予定である。

装飾文様 本古墳の装飾は大

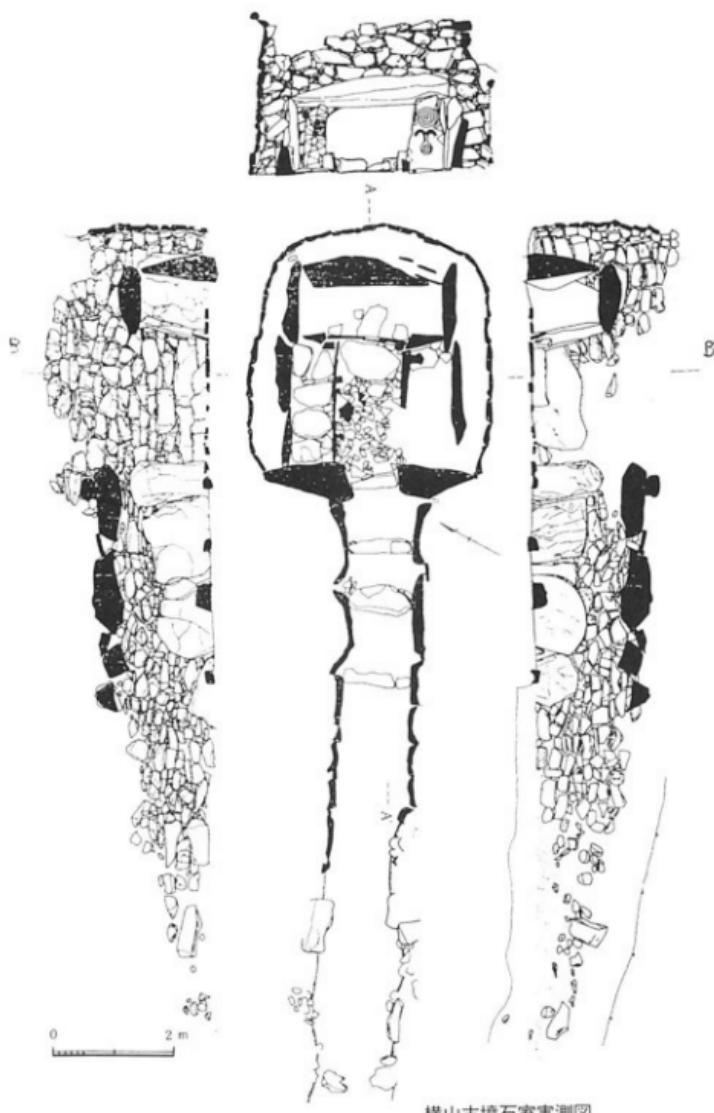


①横山古墳②石川山古墳

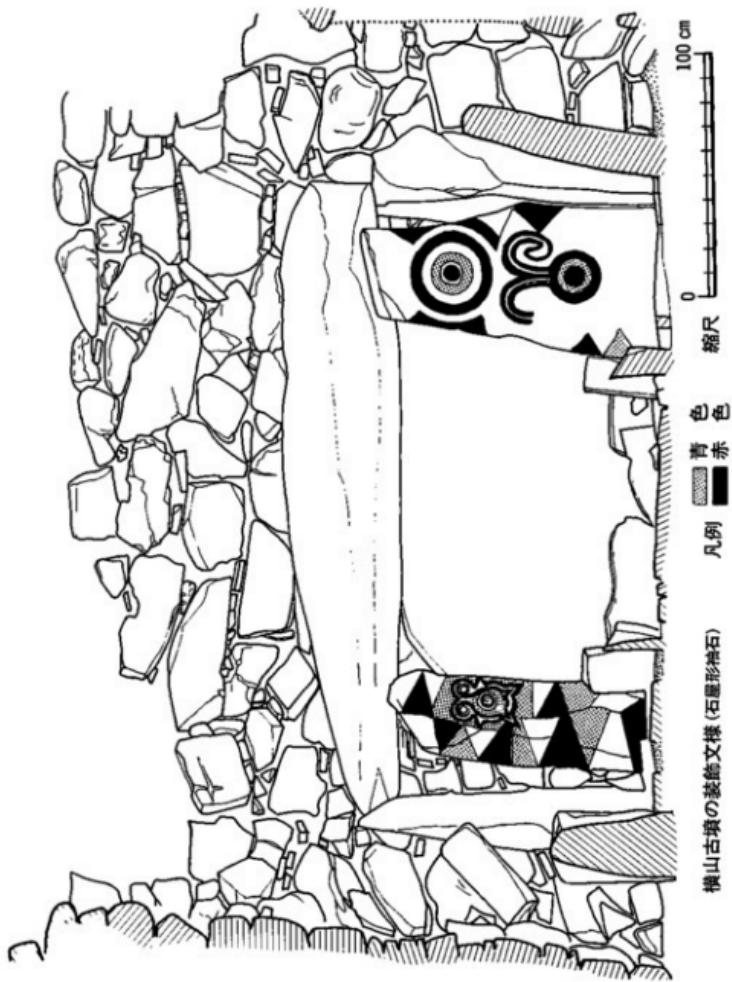


横山古墳墳丘測量図

別して、全面に丹を施した単彩色の部分と幾何学文様に分けられる。前者は、石屋形の屋根蓋裏、玄門近くの羨道上に架した巨石の下面、床敷石、玄室内的通路割石、側壁の一部に認められる。とくに屍床、玄室内通路敷石には丹の彩色の有るものと無いもの、裏面に彩色の施されているものなど煩雑に混じり合って敷石を形成しているが、他の古墳からの転用の結果かも知ないので、考慮の余地がある。後者は、石屋形軒縁、石屋形左右袖石、通路を区切る南北の2屍床の石障、および南側壁沿いの石障、天井石等に施されている。石屋形軒縁の場合、浅い線でふち取った連続三角文が横ならびに走っている。もともと赤、青、白の三色を連続して塗り分けていたと思われるが、剥落がはげしく現在では赤色しか識別できない。石屋形左袖石には、中心にさかさまの状態の双脚輪状文が描かれ周囲の余白は赤、青、白の三角文によって埋められている。同系の文様は、熊本県の国指定史跡釜尾古墳や福岡県に2、3例認められているものである。同袖石の小口部にも連続三角文が施されているが、彩色の順は赤、青、白の循環を繰り返している。一方、右袖石は重圏円文、三角文、藤手文等から構成される。やはり左袖石と同様抽象的图形で、重圏円文の場合も先の三角文と同様、中心から赤、青、白の循環を繰り返す。連続三角文は先にも述べたように、石屋形正面石障、左右屍床の通路側石障に施されている。これら三角文の描かれる石障は、各々1枚石ではなく数個の石材が互いに重なり合って構成されているが、石の縫ぎ目に関係なく三角文は連続し、色は沈線をもって隣りと区別される。その他、右屍床の壁側石障には大小の三角文が丹一色で描かれている。連続等の統一性はないが、リズムを感じさせる文様である。褪色がはなはだしい。石屋形奥壁にも、左下方床面すれすれにわずかながら赤の三角文が識別され、装飾文様のかつての存在を推察せしめるが、剥落がはげしく茫洋として判別できぬのは惜しい。天井石にも一部丹の三角文がわずかに認められる。



横山古墳石室実測図



2. 熊本の装飾古墳の概略

熊本県立装飾古墳館館長 原 口 長 之

(1) 装飾古墳とは

定義 山鹿市の前方後円墳チブサンの後円部には、割石小口積み、丸天井の石室があつて、奥壁ぞいに据えられた家形石棺の内壁などに赤、白、青の顔料で人物像や円文、連続三角文、女人の乳房を連想させるような図柄が描いてある。宇土半島の鶴龍石棺には直弧文が刻んであり、玉名市富尾の原横穴墓群の中には自由画風な人物の線刻がある。

このように古墳の石室や石棺、または横穴墓の壁画に彩色や彫刻による図柄をもつものを装飾古墳と呼んでいる。

装飾古墳はなぜ重要なか。それには大きく言って二つの理由がある。

古事記の建国神話の中にヤマトタケルノミコトの物語がある。東国の大定に苦労されたミコトが亡くなられると、その魂は一羽の白鳥となって、故里ヤマトへ飛んで行ったといわれる。死ねば魂は鳥になって天がけると信じていた古代人の思想を知ることができるが、この物語をのせる古事記は8世紀初頭のものである。ところが6世紀後半に築かれた山鹿市の弁慶が穴古墳には舟につんだ柩と思われるものの上に鳥がとまっている図がある。それは柩におさめられた死者が鳥になって天がけようとしているのを現したものだと考えられている。福岡県南部の珍敷塚にも鳥船塚にもこんな図柄がある。

ということは8世紀の古事記に語られた天がける鳥の思想は、6世紀後半には、すでに成立していたということを示すものである。

装飾古墳が築造されるのは4世紀後半から7世紀頃までである。この時期の日本は史書の空白時代である。その空白を埋めるためには、隣接諸国に残存する僅少の史料と8世紀になった記紀を使用する以外にこの時期を理解する方法はない。装飾古墳の石室構築技法や出土品、とくに装飾文様は、この時代の研究に欠かすことのできない重要な史料であるといわねばならない。

また、美術上からの観点もある。海老原喜之助画伯は生前こんなことを言っておられる。「装飾古墳をみると、いかに日本美術がすばらしいか、またいかにこの時代の生活が豊かであったか、ということがよくわかります。日本

の美術は仏教伝来以後にはじまったというような説は、いまではまったく訂正されていますけど、装飾古墳はその証拠なんです」といわれている。

装飾古墳の行われた時代

大阪府柏原市玉手の安福寺境内にある割竹形石棺の直弧文の彫刻が装飾古墳の初現であるとさ

れ、4世紀後半に位置づけられている。横穴式石室の造られる6世紀から7世紀にかけて北九州を中心に盛行し、その後、次第に衰え、地域によっては8世紀までその余風を遺存している。

熊本県の装飾古墳は、5世紀中葉に編年される天草郡大矢野島の長砂連古墳にはじまって6世紀のチブサン、井寺、千金甲、弁慶が穴、永安寺東、大坊などの壮麗な壁画を生み、7世紀から衰微して、山鹿市鍋田、同じく長岩、玉名市穴観音、ナギノなどの横穴墓群の彫刻を最後として幕を閉じた。

分類 装飾古墳は、その装飾文様の施文個所、施文の方法、文様の種類などによって分類される。一例として小林行雄氏の分類をあげる。²⁾

- 1 壁画系 石室の壁面に彩色もしくは線刻の文様を描いたもの
- 2 石障系 石室の周壁下部にそって、浮彫ないし線刻の装飾を行った板状の石材を組みあわせて、壁画に代用したかにみえるもの
- 3 石棺系 石室内に安置した石棺の外面あるいは内面に装飾をほどこしたもの
- 4 横穴系 自然の崖面を利用して、岩壁を削りぬいて墓室を作った形式の、いわゆる横穴において、主として入口の上部に近い外部の壁面に浮彫の装飾を行ったもの

文様の種類 装飾古墳の文様は一般に次のような種類に分けられる。

- 1 幾何学的文様……直弧文・鍵手文・円文・同心円文・三角文・連続三角文・菱形・巻手文等



チブサン古墳の装飾文様（山鹿市所在）

2 器財文様……^{かぎ}^{なて}・楯・大刀・弓・^{とも}・短甲・双脚輪状文・船・さしば等

3 人物鳥獸文様……人物・馬・鳥・蟾蜍（ひきがえる）等

（2）菊池川流域の装飾古墳

菊池川は阿蘇外輪山の深葉山地に源を発して、菊池、鹿本、玉名の三地方を大きくメアンダーしながら西流して有明海に注ぐ。本流の流路61km、支流66を含めた総延長389.7km、流域の総面積996km²。中流域は田底三千町といわれ茂賀の浦の伝承をもつ菊鹿盆地となり、タケイワタツノミコトの蹴とばし伝説をもつ山鹿市鍋田の狭隘をもって下流域の菊池川デルター玉名平野につらなっている。

洪水によって菊池川の本支流が定期的にもたらしていく堆土、網の目のような井手と用水路、平野周辺の豊富な自然湧水などの自然環境は、いわゆる肥後米の産地として現代でも県下屈指の穀倉地帯形成の要因となっている。古代人にとっても快適な生活環境を提供していたものと考えられ、特異な古墳文化の集積地となった。

この流域には装飾古墳と横穴墓が122基ある。横穴墓の多さは全国でも屈指である。ことに菊池郡七城町の瀬戸口横穴群は253基以上の墓室を、鹿央町岩原は200基以上、山鹿市長岩、同小原大塚、同付城、玉名市ナギノなどの横穴群は100～50余基もあり、その密集は全国屈指である。

墳丘にたてた石人石馬などの石製品をもつ古墳が全国で18例ある。その中の11例は熊本県にあり、この流域に5例あり、6世紀における筑紫国造磐井との親近性を示している。

平成4年3月末現在で全国の装飾古墳の数は約484例あり、その中の186例が熊本県にあり、それは全国の約38.4%にあたる。さらに県下186例中の122例がこの流域にある。

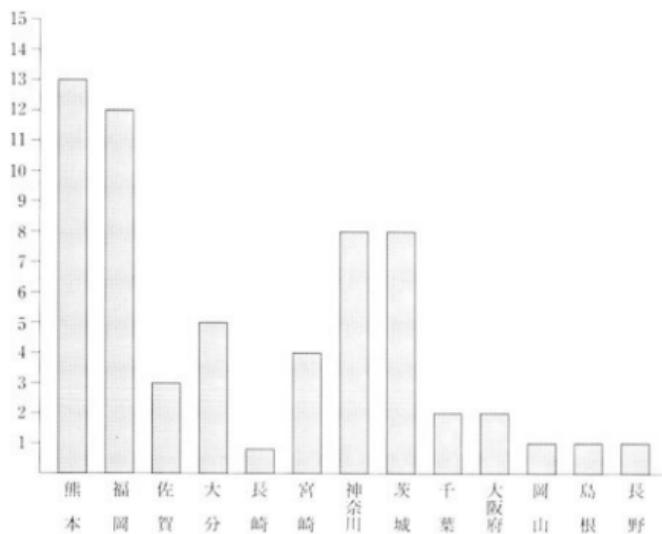
なかでも、チブサン、弁慶が穴、永安寺東、大坊などの古墳、鍋田、ナギノ、石貫穴観音など横穴墓は国の指定史跡で装飾古墳関係の出版物には必ず大きく取り扱われているものである。

(3) 特異な装飾文様

装飾文様の種類については、すでに述べたが、この流域の文様の中で特に注意されるのは人物像と馬と船の図柄である。

人物像 人物像を描いたり刻んだりしたものは全国で約71例あり、そのうち22例が熊本県にあり、この流域に次の21例がある。

- | | | |
|---|----------|--------------------------------|
| 1 | 弁慶が穴古墳 | 2例 |
| 2 | 臼塚 | 〃 1例 |
| 3 | チブサンリ | 1例 |
| 4 | 城横穴墓群 6号 | 1例 |
| 5 | 鍋田 | 〃 8号・26d号・27号 (4例) |
| 6 | 長岩 | 〃 47号と48号の間・52号・101号・108号 (4例) |
| 7 | 小原大塚 | 〃 39号・41号 (2例) |
| 8 | 桜の上 | 〃 2号 (1例) |
| 9 | 岩原大野原 | 〃 I-6号 (1例) |



人物像の分布 (大阪府以外は県名・1992年3月末現在)

- 10 小原浦田横穴墓 2号・3号（2例）
- 11 石貫古城横穴墓群IIの13号（1例）
- 12 富尾原横穴墓群3号（1例）

以上のように流域の古墳や横穴の多くに人物像がある。人物像の位置は墓室の入口か、墓室の奥壁の遺体の枕もとに当ると推定される部分にある。しかも他地方の人物像は福岡県の五郎山古墳、大分県のガランドヤ2号墳などのように騎馬や騎射の人物像であるのに対して、この地方の場合は例外なく墓室の入口または屍体の枕もとと思われるあたりにあり、足を踏んばり両手をひろげて威容を誇示するかのようで、墓室の守衛としての性格をほうふつさせるものがある。

ちなみに石人はその古墳に眠る貴人を永遠に守らせようとして封土の上にたてられたものであるが、それが次第に強調されて臼塚、チブサン古墳のように封土上に石人をたてるだけではあきたらず石室内にも同じ意図の人物像をはべらせるまでになった。一方では表飾の意味もまた強調されて筑紫君磐井の墳墓に比定される岩戸山古墳に見られるような大量の石人石馬類の製作となった。この葬制は磐井の政治勢力の伸張とともに大いに高揚し、広く肥後まで普及してきたが忽然として、ある事情によって石人樹立の風習はやめざるを得なくなったのではないか。528年物部荒鹿火によって、磐井が大和朝廷の誅に服したことがその原因かも知れない。しかし伝統は容易に消えるものではない。殊に葬の儀式においては然りである。石人樹立の伝統がかたちを変えて、この地方の人物像になったものと思われる。

多い馬の絵 馬の絵は全国で約26例ある。福岡県8、熊本県9、佐賀・大分は2例、宮崎・岡山・神奈川・千葉・福島は各1例である。熊本の場合、弁慶が穴古墳の壁画には、合わせて11頭の馬が赤色で描かれているのは特異である。古墳時代中期は大和朝廷が全国統一の余勢を駆って朝鮮半島に進攻したため国内には生気がみち溢れ、はつらつとした新しい文化が展開した。このころ乗馬の風習が伝来したことであろう。これがいつごろ始まったかは明確にし得ないが、副葬品の中に馬具があらわれるのは5世紀中期ごろのことで6世紀になると急増する。遺物にあらわれた当時の馬具は多分に鎧馬的な色彩のつよいものであって、実用品的なものは6世紀に多いことからして乗馬の普及はおそらく6世紀あたりからであろうと考えられる。弁慶が穴を

6世紀後半に編年されるものとすれば、当地方における馬の移入ひいては乗馬の普及が想察される。

ゴンドラ型の船 船の絵は福岡県に13、熊本県に21、佐賀・大分・長崎に各3例、神奈川・千葉・茨城に各1例、合計46例ある。

熊本県の21例のうち宇土市仮古墳・宇土郡の塙原第1号墳・桂原古墳は、いずれもマストをたて船団を作つて大海を航海せんとする活動的な雰囲気をもつものであるのに対してこの流域の船は両端が高く伸びた、いわゆるゴンドラ型の船である。菊池川は大正の初めまで城北における物資輸送の大動脈で文化文政年間には1,000艘の船が上下していたことが記録に見える。古墳時代においては、より重要な輸送手段であったものと思われる。古墳の絵は菊池川と関連するものであろう。また、船は単独で描かれており弁慶が穴の例をのぞいては船体だけで積荷がなく、いかにも静的なものであることから、これは生活風景の一こまというより、被葬者の富を示すためのものであり副葬品に代用したものと考えるべきであろう。

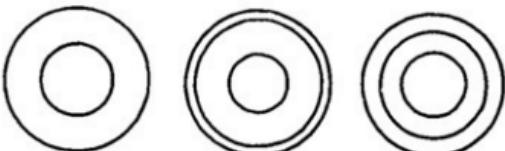
装飾古墳の三つのタイプとその背景 樋口隆康氏は彫刻・彩色の装飾技法と石室構築技法を組みあわせて北九州の装飾古墳を二つの系統に分け、^③ 主室が長方形で室の断面が梯形、栗石積みの側壁、奥壁に石棺や石屋形の施設があり壁画に彩色を使用するタイプ

主室が方形で側壁は
割石の小口積み、穹窿
形の天井、主室内を石
障によって四区にわけ
彫刻によって装飾する
タイプ



筑後型

とし前者は筑後平野
を中心にして筑後川をさか
のぼって大分地区に及
び、後者は熊本平野を
中心に一部は筑後平野
にも多いと指摘された
この二つのタイプを



肥後型

便宜上、筑後型、肥後型と呼ぶことにすれば、この二つのタイプは、それぞれ筑紫君、火君の文化圏の性格を示すものである。筑後型の彩色の装飾技法は大陸に親近するものであり、肥後型の彫刻技法は近畿に発現した直弧文の彫刻につながるものであり、大和朝廷に結ぶものである。

元来、筑後型すなわち彩色化圏であった県北、菊池川流域の古墳には時代が降るにつれて肥後型の彫刻技法があらわれてきて、桜の上横穴の彩色など2・3例を残して、あとはみな彫刻技法にかわることや、彩色古墳の雄とされる弁慶が穴古墳に浮彫の人物像が添えられるなどなど肥後型の装飾技法の進出は528年の磐井の敗戦後の火君の勢力伸張を物語るものであろう。

樋口氏の分類以後三十数年たった現在、装飾古墳発見の事例が増加し、また、その集成も進んで全国における装飾古墳の全貌を見とおすことができるようになつた。その結果、私は二十数年前から前述の筑後型、肥後型のほかに近畿型とでも言うべきタイプを設定し得るのではないかと考えるようになった。

近畿型というのは、筑後型系統の巨石墳または横穴墓に自由画風の線刻を施したもので、代表例として大分県の伊美鬼塚古墳がある。筑後型の石室後壁右側巨石に船上の人物と帆走船などを主体に多数の動物の動きを線刻し、左壁下部の巨石には群存する鳥類を刻み「器物、動物、人間などの単独描写を主体とする壁画古墳とは全く別な趣で描かれ」^④ ている。

古墳時代末期すなわち7世紀に属するもので、大阪の高井田横穴群をはじめ島根に1例、長野1例、千葉2例、茨城8例、福島4例、大阪府1例、神

5 茨城・白河内古墳

6 大分・伊美鬼塚古墳

7 大分・伊美鬼塚古墳

大分県伊美鬼塚古墳

— 23 —

奈川2例、埼玉1例、福岡9例、大分6例、佐賀6例、宮崎4例、そして熊本には宇土地方の桂原2号・梅崎・仮又・塙原1号墳、玉名市原横穴3号墓、鹿本郡石川山4号墳の6例がある。

このタイプがいかなる政治的要因によるものであるか明瞭でないが、装飾の技法・画題が広く関東までおよんでいることから、特定の地方豪族の勢力圏として考えるよりも近畿勢力の九州監察拠点的なものとして考えるべきであろう。^⑤

菊池川流域の古墳に華麗ないろどりをそえた装飾文様は近畿型のタイプを最後として姿を消すが、同時にそれは古墳時代の終末であり次の時代の仏教儀礼の登場であったのである。

注①平凡社版「太陽」1964年2月号

②小林行雄「装飾古墳」1964年・平凡社

③樋口隆康「九州」(日本考古学講座5所収)・1956年・河出書房

④賀川光夫「鬼塚古墳」(日本原始美術5古墳壁画所収)・1965年・講談社

⑤原口長之「九州の装飾古墳とその背景」(教育くまもと所収)・1973・熊本県
教育委員会

⑥人物像その他の個数は1992年3月末現在を示す。

3. 集中的分布の背景をさぐる

山鹿市立博物館副館長 中村幸史郎

(1) 全国から見た熊本の装飾

古墳時代は、主として古墳の形態や内容の変化によって前期(4世紀)、中期(5世紀)、後期(6~7世紀)に分けることができる。

九州では、畿内大和政権の影響が強いと考えられる竪穴式石室をもった古墳が前期に現れる。ところが前期末からは朝鮮半島南部に見られる竪穴系横口式石室が出現し、横穴式石室の発生に大きく関わってくる。

中期には、舟形石棺をはじめ多くの石棺が畿内から伝えられるが、その中でも家形石棺については、妻側に入口を設けた九州独自の横口式石棺が創造され、あるいは、これを取り囲むように造られた横穴式石室が生まれた。また、熊本県宇土市周辺を中心に分布する石室は、横穴式石室に板石を囲んだ特殊なもので『肥後型』と呼ばれている。

後期には、横穴式石室をもった古墳と横穴が造られるが、とくに菊池川流域を中心として、石屋形と呼ばれる石棺を組合せた古墳や横穴が多く分布している。

古墳構造の様式のみを見ても、九州は強大な大和政権に対抗するかの如く、独自の文化を築いてきた。

とくに、装飾古墳については九州独自の文化と言っても過言ではなかろう。全国に409基(昭和62年5月末現在)の装飾古墳が存在するうち、九州には275基(67.20%)を数えることができる。このうち、熊本県下には181基が確認されており、全国の約半数が集中していることになる。さらに、福岡県の56基を合わせると九州内において86.2%を占めることとなる。

筑紫の国と火の国に、なぜ、かくも装飾古墳が集中しているのか。その謎は、装飾古墳自身が解き明かしてくれるであろう。

(2) 県下の装飾古墳事始め

宇土半島の基部(現宇土市周辺)には、県下で最も早く竪穴式石室をもつた畿内型古墳が出現した。この地は火の君の本拠地と考えられる地域で、九

州の中でも、竪穴式石室をもつ古墳が一番集中している地域として注目される。また、装飾古墳の出現も宇土半島から他の地域へと広がる傾向を示している。

4世紀から5世紀にかけて、石棺に線刻の直弧文と円文を施した鴨籠古墳や障壁（石室内部の仕切石）に直弧文と円文のある井寺古墳等は古いタイプの装飾と言える。これらは、福岡県広川町の石人山古墳や久留米市日輪寺古墳等との関連性が強く、火の国と筑紫国との関係を考えるうえでも重要な古墳と言えよう。

5世紀には、障壁をもつ肥後型の横穴式石室にレリーフ（浮彫）で同心円文や韁、盾などの武具を描く小田良古墳が、さらにレリーフの上から着色した千金甲古墳等が出現し、宇土半島から周辺の地域へと波及していった。

技術的には線刻による直弧文から浮彫のそれに変化し、文様的にも直弧文から武具を多く描くようになった。

直弧文について古代の人々がどの様な考えをもっていたのかを示す資料として、国越古墳出土の鹿角製柄がある。矛の柄と考えられる部分に直弧文が施されているが、直弧文のもつ魔力によって身を守っていたものと思われる。

また、円文については、一般には太陽を描いたと言われているが、鏡を表しているとも考えられる。それは同心円文の中心部が鏡の鉦（つまみ）を表現しているからである。鏡面の副葬が終わった段階から、装飾古墳の中に円文や同心円文が出現し始めたことからも判るが、鏡が入手できなかったため、彫刻によって古墳内に鏡を描いたものと思われる。

(3) 彩色古墳の開花とその意味

6世紀になると、全国各地で横穴式石室が築かれるが、熊本県においても例外ではない。とくに石室内に石屋形を設けた古墳が多く築かれ、5世紀代の肥後型石室と同様、地域的特徴を備えた古墳であると言える。石屋形をもつ古墳は熊本県下に33基、福岡県下に5基を確認するのみである。熊本県下では菊池川流域18基、白川流域12基、その他の流域で3基が存在し、菊池川流域から熊本市にかけて多く分布している。さらに、これら石屋形をもつ古墳の殆どに、彩色を主とした装飾が施されている点も重要な地域性の表れである。

菊池川下流域では永安寺東古墳をはじめ、永安寺西古墳、大坊古墳、馬出古墳、塚坊主古墳等が見られ、中流域ではチブサン古墳、弁慶が穴古墳、臼塚古墳等の装飾古墳がある。まさしく菊池川に沿って装飾古墳が花開いたと言っても過言ではない。

文様は、円文や三角文を中心とした幾何学文様と人物、馬、舟、武具等の具象文様とに分けることができる。技術的には、線刻やレリーフも見られるが、主として彩色による文様を施している点では5世紀代の装飾とは趣を異にしていると言える。

これまで見てきた装飾古墳は、石棺や石室内に施され、死者の周囲を飾ったと言える。さらに、これらの施設は日常では暗黒の世界に存在するものであり、生きている人々のために、いいかえると見せるために描かれたものではないのである。このことは、装飾古墳の意味を考えるうえで大変重要なことである。

強大な大和政権によって地方豪族が与するなか、九州とくに筑紫国と火の国だけが自己主張をするかの如く、独自の古墳文化を築いてきた。この様な風土であったからこそ、大和政権を根幹から揺るがした筑紫国造磐井の反乱（527年）が発生したとも言えるであろう。

(4) 横穴墓の装飾と意義

火の山阿蘇から流れ出た凝灰岩は県下全域に広がっている。6世紀後半、凝灰岩を利用して横穴墓群が盛んに築かれ、その数は250群、総数4,000基を超えると言われる。

横穴の多くは河川の流域に見られるが、とくに菊池川流域には122群、3,000基を超え、全国屈指の横穴墓密集地帯となっている。さらに、装飾をもつた横穴墓も多く、県下116基の実に103基が菊池川流域に集中し、あとは球磨川流域に9基、その他に4基を数えるのみである。

横穴墓の装飾は技術的に見ると線刻、レリーフ、彩色が見られ、文様的にも円文や三角文を主とした幾何学文様と人物、舟、武具の具象文様がある。

菊池川下流域では彩色による円文や三角文を狭門（入口）に描いたものが多く、また、奥壁に石屋形を造り出し、その周辺にレリーフで武具を刻んだものも見られる。中流域では彩色もあるが、多くはレリーフと線刻による装

飾が施されている。

線刻による装飾は、鞆等の武具も見られるが、殆どが円文や三角文の幾何学文で、横穴の内壁や羨門に施されている。レリーフによる装飾は、人物や舟、鞆、盾といった具象文様ばかりで、その殆どが横穴外壁に刻まれているのが特徴である。

全国的に見ても、横穴墓の外壁や羨門に装飾を施したものは、殆ど熊本県だけにしか見られない(大分県に2例)。先に述べたように、装飾は本来古墳内部に施されていたが、横穴の装飾はその意味から考えると本質的に異なっていることがわかる。

死者のために描かれた文様は、いわば鎮魂の意味であり、それは内向性を示している。しかし、横穴のレリーフは、生きている人々への自己主張とも言えるものである。

(5) 石人・石馬造立の背景

阿蘇凝灰岩で武人や馬等を形作った石製品を石人・石馬と呼んでいる。石人・石馬をもつ古墳は熊本県が最も多く12を数え、次に福岡県の5、大分県2、鳥取県1を数える。しかし、出土品の数では福岡県岩戸山古墳が最も多く、破片も含めると100点をこえている。

石人の起源については、中国王陵に立つ石人・石獸に求める人もいるが、石人・石馬の初現が5世紀前半で、武装石人であるところから、古墳を守護する意味で立てられたものと考えられる。

石人・石馬には武装石人や馬の他に、裸体石人、猪、飾馬、鶲、水鳥、鞆、盾、壇、蓋(きぬがさ)、腰掛等が作られており、これ



チブサン古墳の石人（東京国立博物館蔵）

らの多くは6世紀前半に位置づけられる。

石人・石馬が最も多く出土する福岡県八女市の岩戸山古墳は、筑紫国造磐井の墓とされており、『筑後國風土記』逸文によれば、石人・石盾が各60枚並んでおり、別区では裁判風景の石人達が立てられていたことを伝えている。磐井は、繼体天皇21年(527)大和政権の朝鮮半島進出を阻止しようと反乱を起こしたことで有名であるが、その際、近隣の国々と連携を保って戦った。しかし、戦いに敗れたため、大和政権によって磐井の墓をはじめ、石人・石馬は全く破壊されたとも伝えられている。

従って石人・石馬を有する古墳は磐井氏との関係の深い豪族と考えられている。その意味から石人・石馬の分布を考えると、熊本県下に12の古墳や遺跡が存在しており、この中で、火の君の本拠地の宇土半島近くに4か所、菊池川流域には6か所、その他2か所となっている。石人・石馬の分布と装飾古墳の分布を重ねると、両者が実に菊池川流域に密集していることが理解できる。

このことは、菊池川流域の重要性が高かったというのみならず、この地域に強大な豪族とそれを取り囲む人々が生きていたことを示唆している。だからこそ白村江の戦(663)以後大和政権がこの地を選び、鞠智城を築いたのであろう。(昭和62年執筆の中村氏の旧稿を再録したものである。桑原)

4. 主な装飾文様の解説

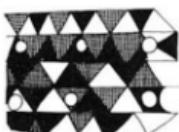
熊本県立装飾古墳館長 原 口 長 之



岡山
千足古墳 熊本
長砂連古墳



熊本
井寺古墳



熊本
大坊古墳



島根
丹花庵古墳



熊本
大鼠藏
束籠古墳 福岡
日輪寺古墳 福岡
日ノ岡古墳 熊本
長迫古墳

直弧文（ちょくこもん） 定規とコンパスを使って直線と弧線を組み合わせた文様で、水字貝からヒントを得て始めたという説がある。貝が蓋を閉じると絶対に外部から開けられないという貝のもつ呪力にあやかったものといわれる。近畿におこって岡山県の千足、福岡県の石人山、日輪寺、浦山、本県の長砂連、鶴籠、井寺の各古墳に見られる。線刻に彩色を施してあるのが多い。

三角文（さんかくもん） 熊本県の塚坊主、大坊、永安寺東、チブサン、福岡県の王塚、佐賀県の大田などの古墳には、とくに多く用いられている。ふつう連続して用いられ彩色によるものが多い。塚坊主古墳の石屋形奥壁は4段に三角文をつらね、その中に円文をまじえて赤・白・黒（？）で塗り分けている。三角文をつなぎあわせた菱形文はチブサン古墳にみられる。三角文描写のヒントが何によつたものか判らない。

円文（えんもん） 円文とくに同心円文は線刻にも彩色図にも、もっとも多く用いられている。チブサン古墳では、赤地の中に白色で塗りつぶした円文を並べ、永安寺東古墳では赤く塗りつぶした円文を並べている。円文には三角形、菱形と

福岡
珍敷塚古墳福岡
塚花塚古墳福岡
王塚古墳熊本
弁慶が穴古墳福岡
王塚古墳福岡
五郎山古墳熊本
鍋田横穴墓群茨城
鍋割横穴墓群福島
泉嶋横穴墓群

組み合わせて単なる文様として使われているもの、太陽または鏡をあらわしたもの、弓の的ではないかと思われるものなどがある。幼稚園の先生方によると、園児がもっとも早く描き始める図柄だとう。

蕨手文（わらびてもん） 春の野に萌え出るワラビの芽をおもわせるような文様で、彩色図だけに見られる。福岡県珍敷塚では船上に立て並べられた盾の間から、萌え出るような形で描かれ、日の岡では二重円文の間から背中あわせに描かれ、王塚では蕨手の直線部を外側にしてハート形をつくっている。

馬（うま） 馬の絵は彫刻にも彩色画にもみられるが、静的なものと動的なものに分けられるようである。菊池川流域では弁慶が穴古墳の6面の馬像の中の2面を除いて、その他はすべて首をたれて立つ静的な姿である。福岡県王塚古墳でも馬具をつけ人を乗せているが静的である。同県の五郎山や福島県清戸迫横穴墓では騎射の人物をのせ疾走している。動的で生活図である。

人物（じんぶつ） 彫刻にも彩色図もある。守衛者を意味するものと、狩りなどに興ずる人物の生活図に大別される。熊本のチブサン、臼塚、弁慶が穴の各古墳、桜の上、長岩、鍋田、小原大塚、小原浦山などには両手を挙げ両足を踏んば



熊本
弁慶が穴古墳



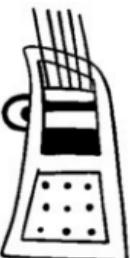
大分
伊美鬼塚古墳



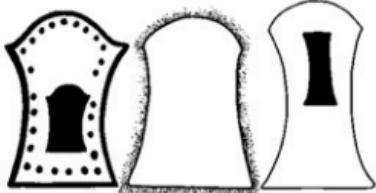
福岡
珍敷塚古墳



熊本
千金甲古墳



福岡
珍敷塚古墳



福岡
王塚古墳

熊本
鍋田横穴墓群

福岡
日ノ岡古墳

って威容を誇示した人物があり、城、富尾の原、茨城県猫渕横穴墓にはいかめしい人物像がある。ともに墓室を守衛する者であろう。福岡県の五郎山や大分県のガランドヤ、伊美鬼塚などには騎乗する人物の生活図がある。

船（ふね） 船首と船尾がそりあがった形の、いわゆるゴンドラ形の舟と自由画風に描かれた舟がある。福岡県鳥船塚、珍敷塚、熊本県の弁慶が穴などの古墳にはゴンドラ形の舟があり、前二者には舟をこぐ船頭がおりへさきに鳥がとまっている。弁慶が穴の場合は柩と思われる荷をつみ鳥がとまっている。自由画風に線刻したものに熊本県桂原古墳、大阪府高井田、神奈川県洗馬谷横穴墓などがある。自由画風のものは古墳時代終末期のものに多い。

韁（ゆき） 矢を入れて背に負う容器のことで彫刻と彩色画にみられる。器物をあらわす圓形ではもっとも多く使われている。熊本県千金甲、福岡県王塚などの古墳では矢じりはすべて容器の中におさまっているが、珍敷塚や五郎山、富永古墳などでは矢じりが突き出している。どきどきと鋭いやじりによって、より威容を誇示したものであろう。韁はユキともユギとも読むが古墳時代の場合は一般にユキと讀んでいる。

盾（たて） 盾は地上や戦車の上にお



双脚輪状文

いて敵の矢を防ぐ置盾（おきたて）と片手にもって敵の武器を防ぐ持盾（もちたて）がある。装飾古墳に描かれたり彫られたりしているのは持盾が多いようであるが、熊本県鍋田横穴墓27号墳や福岡県王塚古墳の盾は大きさからみて置盾であるかも知れない。



福岡
竹原古墳

双脚輪状文 左図の1と2は福岡県王塚古墳、3は熊本県釜尾古墳のもので、ともに彩色による。どういう意図をもつて描かれたものか判らないが、おそらく差羽をかたどったものではないかといわれる。

差羽 翼ともかく。鳥の羽や織物などで大きな團扇の形に作り長い柄をつけたもの。貴人の左右より侍女などがさしかざすのに使った。図は福岡県竹原古墳壁画。



大分
伊美鬼塚古墳



茨城
幡横穴墓群

自由画風の線刻 装飾古墳の文様は彩色で描いたり、浮彫りや陰刻であらわしたりするものが多いが、金釘の先でひっ搔くような手法で自由画風に刻んであるものがある。一見稚拙にみえるが、いかにも動的で躍進である。

(以上、挿図は齊藤忠「日本原始美術5」講談社)によった。

開館記念展出品御案内

（現在、館内の見学通路壁面に關係、装飾
パネル類の一部展示をいたしております。）

5. 開館記念展示品一覧

(1) 展示棚の展示物

企画展示室展示配置図

No-1 展示棚 (レプリカ展示)

- 塙坊主古墳の石屋形と装飾文様 1点
- 大坊古墳の石屋形と装飾文様 1点

No-2 展示棚 (遺物展示)

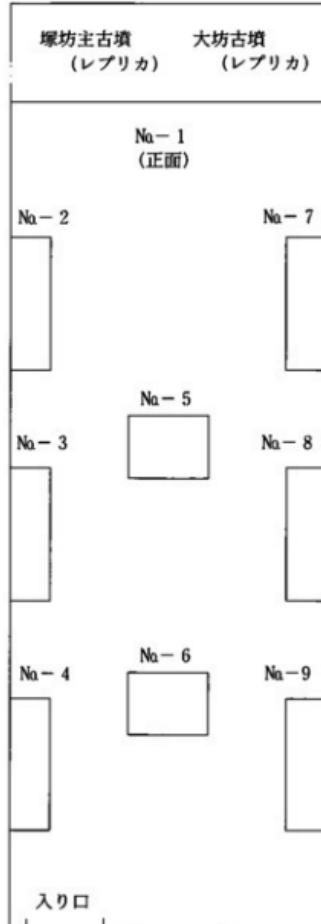
- 塙坊主古墳出土品 一括
直刀1、釣り金具1、鉄鎌1束、
金環1対、銀環1対
- 解説パネル

No-3 展示棚 (遺物展示)

- 塙坊主古墳出土品 一括
玉類10、四獸鏡1面、轡1、杏葉
2、留め金具1
- 解説パネル

No-4 展示棚 (遺物展示)

- オブサン古墳出土品 一括
馬具類 (轡、鉗具、雲珠、杏葉、
釘、鋤)
武具類 (鉄鎌、刀子、弓金具)
装身具 (金環、銀環)
雜器類 (須恵器類)
- その他
- 解説パネル



No-5 展示棚（遺物展示）

- チブサン古墳周溝出土品
埴輪脚部 2 点、形象埴輪部品 5 点、その他
- 解説パネル（馬の埴輪図）

No-6 展示棚（遺物展示）

- 釜尾古墳出土品その他
- 解説パネル

No-7 展示棚（装飾石材）

- オブサン古墳装飾文様
- 仕切り石の文様のレプリカ 1 点
- 解説パネル

No-8 展示棚（色見本パネル）

- レプリカ製作色見本パネル
- 解説パネル

No-9 展示棚（文献関係）

- | | | | | |
|---------------|------|---------------------|----|-----|
| ○肥後国誌 | 森本一端 | 明和 9 (1772) 年 | 復刻 | 1 点 |
| ○筑後將士軍談 | 矢野一貞 | 嘉永 6 (1852) 年 | 複写 | 1 |
| ○同上内容展示(コピー) | 〃 | 鍋田横穴墓見取り図(嘉永 2 年) 1 | | |
| ○考古学研究報告第 1 冊 | 浜田耕作 | 大正 6 (1917) 年 | 復刻 | 1 |
| ○解説パネル | | | | |

(2) 展示棚以外の展示品

- | | |
|---------------------------------------|-----|
| ○横山古墳装飾文の展示
(展示室壁際に、石屋形の左右袖石の現物展示) | 2 点 |
| ○北原 1 号横穴墓出土楯形石製品
(展示室壁際に展示) | 1 |

○横穴墓装飾入り閉塞石 (展示室壁際に展示)	1
○袈裟尾高塚古墳出土の韁を刻んだ石材 (展示壁際に展示)	1
○その他石製品	1

(3) 壁展示関係 (写真パネル展示) 熊本県関係装飾文様

(古墳)

○チブサン古墳	山鹿市大字城字西福寺	(国)家形石棺奥壁他	2点
○弁慶が穴古墳	山鹿市大字熊入	//	1
○鴨籠古墳	宇土郡不知火町大字鴨籠字坊ノ平	//	1
○井寺古墳	上益城郡嘉島町大字井寺字富屋敷	//	1
○小田良古墳	宇土郡三角町大字小田良	//	1
○千金甲古墳甲	熊本市小島町字勝負谷	//	1
○田川内第1号墳	八代市日奈久新田町字田川内	(県)	1
○釜尾古墳	熊本市釜尾町字同免	(国)	1
○永安寺東古墳	玉名市大字玉名字永安寺	//	1
○大坊古墳	玉名市大字玉名字大坊	// 石屋形・奥壁	1

(横穴)

○付城横穴墓群(72号)	山鹿市大字城字付城	(県)	1
○石貫ナギノ横穴墓群(8号)	玉名市大字石貫字ナギノ	(国)	1
○大村横穴墓群(7号)	人吉市城本町大字城木字鳥岡	//	1
○大村横穴墓群(8号)	人吉市城本町大字城本	//	1
○鍋田横穴墓群(27号)	山鹿市大字鍋田字東	//	1
○長岩横穴墓群(108号)	山鹿市大字小原字長岩	(県)	1

(石人)

○臼塚石人	山鹿市大字石字臼塚	(県)	1
○チブサン石人	山鹿市大字城字西福寺		1
○清原石人	玉名郡菊水町大字原口字清原	(県)	1
○木柑子石人	菊池市大字木柑子字下向原	//	1

(拓本関係)

○田中城下横穴墓 玉名郡三加和町	1
拓影パネルの展示（線刻の三角文）	
○広浦古墳石材	2
拓影パネルの展示	

(4) 壁関係展示（写真パネル展示）福岡県関係装飾文様

○浦山古墳	久留米市上津町大字浦山字二軒茶屋(国)家形石棺	1点
○日輪寺古墳	久留米市京町日輪寺境内 (〃) 柳壁	1
○下馬場古墳	久留米市草野町大字吉木字下馬場 (〃)	1
○珍敷塚古墳	浮羽郡吉井町大字富永字西屋形 (〃)	1
○鳥船塚古墳	浮羽郡吉井町大字古畠 (〃)	1
○古畠古墳	浮羽郡吉井町大字古畠 (〃)	1
○日の岡古墳	浮羽郡吉井町大字若宮若宮八幡 (〃)	1
○重定古墳	浮羽郡浮羽町大字朝田字重定 (〃)	1
○乗場古墳	八女市大字吉田字乗場 (〃)	1
○丸山塚古墳	八女市鶴間田字宇土 (〃)	1
○萩ノ尾古墳	大牟田市東萩ノ尾町 (〃)	1
○王塚古墳	嘉穂郡桂川町大字寿命字坂元 (〃) 壁面・石屋形	1
○桜京古墳	宗像郡玄海町大字牟田尻桜京 (〃) 石屋形	1
○古月横穴墓	鞍手郡鞍手町大字古門文字兵丹 (〃)	1
○穴ヶ葉山古墳	築上郡大平村下唐原字穴ヶ葉山 (〃)	1

(5) その他の展示

（石人模刻）

- チブサン石人 当館入り口園路の右手に展示

(6) その他

（注）なお、会期中一部展示替えや変更を行うことがあります。

(7) 各展示棚の解説パネル内容

○菊池川流域の装飾古墳

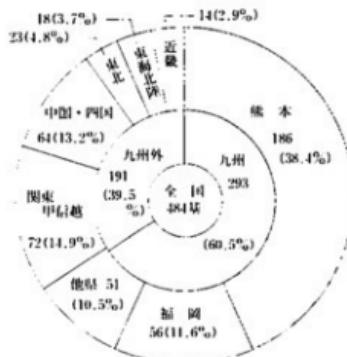
— 他県に誇りうる文化財 —

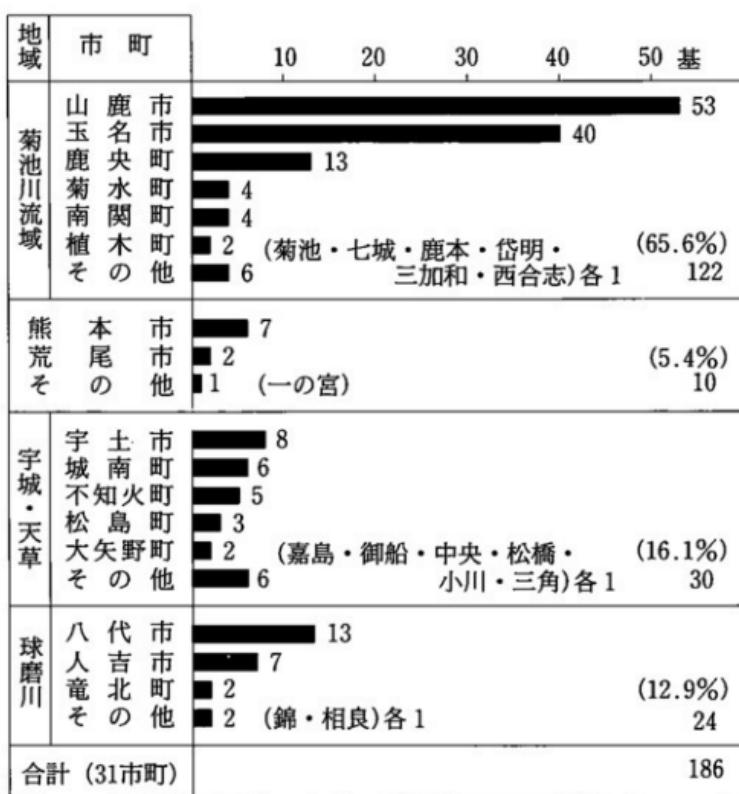
熊本県が他県に誇りうる文化財は、装飾古墳と眼鏡橋です。装飾古墳は全国で484基（平成4年3月31日現在）ありますが、その内の186例が熊本県内に分布しているのです。186例の内訳は、石棺・石室が68例、横穴墓が118例となっています。また、驚くことにそれらの半数近くが、山鹿を中心とする菊池川流域に集中しているのです。

山鹿にも、チブサン古墳、弁慶が穴古墳、鍋田横穴墓群などの国指定の史跡や、馬塚古墳、オブサン古墳、長岩横穴墓群、岩原横穴墓群等の県指定の史跡が数多く残されています。

その菊池川流域における集中的分布の背景をさぐり、装飾古墳の研究と保護・活用を使命として新設されたのが当熊本県立装飾古墳館であり、存在意義もそこにあると言えるでしょう。

装飾古墳分布状況





平成 4 年 (1992) 3月末現在の熊本県内の装飾古墳の総数は、186例となっています。

○三角形の系譜

— 塚坊主古墳と大坊古墳 —

古墳等に描かれる装飾文様で最も古く現れるのは、嘉島町の井寺古墳などに見られる直線と弧を組み合わせた直弧文です。しかし、現在までその起源、意味するところなどに関して納得いく学説を提示した人はなく、考古学上依然として謎に包まれている文様です。私達はこの図柄に、限り無い宗教性と呪術性を感じます。

直弧文の次に現れるのは、円・同心円・三角形・菱形等の幾何学文様ですが、菊池川流域の古墳には、このなかでも、とくに三角形が好んで描かれています。三角形も直弧文と同様に、著しく呪術性を帯びた形といえましょう。三角形と言っても、古墳等に描かれるものには不思議と直角三角形は見られません。一番多いのは二等辺三角形で、正三角形もあり多くないです。何故でしょうか。また、装飾文様に三角形はあっても四角形はありません。しかし、菱形はチブサンや弁慶が穴古墳の文様等にみられます。菱形に対角線を引くと、二つの三角形が生まれるのです。三角形の源流は本来菱形だったのではという思いにもかられます。翻って、かつて小学校の運動会の時、無数に張り巡らされた赤い二等辺三角形の旗は、まさに連続三角文と瓜二つ。何を意味したものだったのでしょうか。また、二等辺三角形の揚げ豆腐は多くても、直角三角形の揚げ豆腐がすくないのはどうしてでしょう。

さらに時代がくだって、横穴墓が盛んに作られた時代、入り口部の外壁に浮き彫りするのは人物像や武具類であっても、墓室の最も遺体に近い仕切り石や奥壁に微かな沈線で刻まれるのは、連続三角文や菱垣状の菱形文などが多いのです。また、身を守るために楯等の縁にも、連続三角文が巡らされています。三角形に対する古代人の特別の思いは一体何であったのでしょうか。

ここではほぼ同時期で、菊池川をはさんですぐ近くに位置する二つの古墳の、石室奥壁に描かれた三角文様の組み合わせを比較することによって、この謎に迫れるのではと思い、この展示を企画いたしました。

○アンバランスと調和の装飾文様

—塚坊主古墳—

塚坊主古墳は、現在周囲を削りとられて小さくなっていますが、本来は長さ44.3mの墳丘をもつ前方後円墳であったことが、県文化課の史跡整備の調査でわかりました。さらに、平成3年の調査では、石室内の石屋形の内面に描かれた装飾文様の全貌も明らかになりました。

文様は、石屋形の奥壁と左右の側壁に描かれています。モチーフは三角文ですが、連続三角文を主体に、菱形や大きさの異なる三角文を配してアンバランスを強調しながら、全体的に見るとバランスを感じさせる不思議な文様です。

彩色には、赤・白の顔料を用いていますが、黒色を使った可能性もあるようです。文様は、菊池川をはさんだ対岸の玉名市にある大坊古墳や、山鹿市のチブサン古墳の文様と大変よく似ています。この事は、菊池川の流域に、同じ文化を共有する勢力が存在したことを物語るあかしといえるでしょう。

塚坊主古墳



大坊古墳



○安産の神様

— オブサン古墳 —

県指定史跡であるオブサン古墳は、昔から安産の神様として、隣りの乳の神様であるチブサン古墳と共に、地元の人々に親しまれてきた古墳です。

この古墳も、以前は周囲を削り取られ、小さな円墳となっていましたが、調査の結果、入口部の左右に突堤を持つ、大変珍しい「突堤付き古墳」であることがわかり、整備復元工事を行いました。

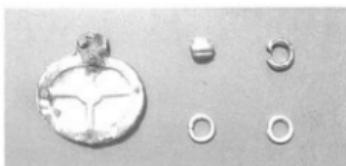
装飾文様は、奥室の左屍床の仕切り石に連続三角文が、また石屋形の奥壁左寄りの所にも、小型の桶もしくは鞆が赤色の顔料で描かれているのが確認できました。調査時には右屍床の仕切り石は失われていましたが、ここにも左屍床と同様の文様が描かれていたのでしょう。石室内からは、馬具類をはじめとする多くの副葬品が出土しましたが、なかには中世の人骨や遺物もみられ、後世に追葬がなされた事などもわかりました。



整備復元前のオブサン古墳



整備後のオブサン古墳



出土遺物の一部



調査時の突堤部の状況



仕切り石の装飾古墳

○人と馬と船

— 菊池川流域の特色 —

菊池川流域の装飾古墳の図柄で、とくに目立つのは人と馬と船でしょう。チブサン古墳では、おそらく死者の枕とともに描いたものと思われる人物一足を踏んぱり両手を開いてあげた姿が描かれています。悪霊の侵入を防ぐ意味のものでしょう。長岩、城、桜の上、小原大塚、浦田、石貫、原などの横穴墓の図柄も同様な意味のものと思われます。舟の絵も特徴的です。弁慶が穴にも永安寺東古墳や桜の上、長岩などの横穴墓にもあります。また弁慶が穴や永安寺東、鍋田横穴墓等の馬もよく知られています。人物像や船や馬の絵に古代人はどんな夢を託したのでしょうか。これらの絵の背後にある社会のしくみなども考えてみましょう。



人物像（弁慶が穴古墳）



馬をつんだ舟（弁慶が穴古墳）

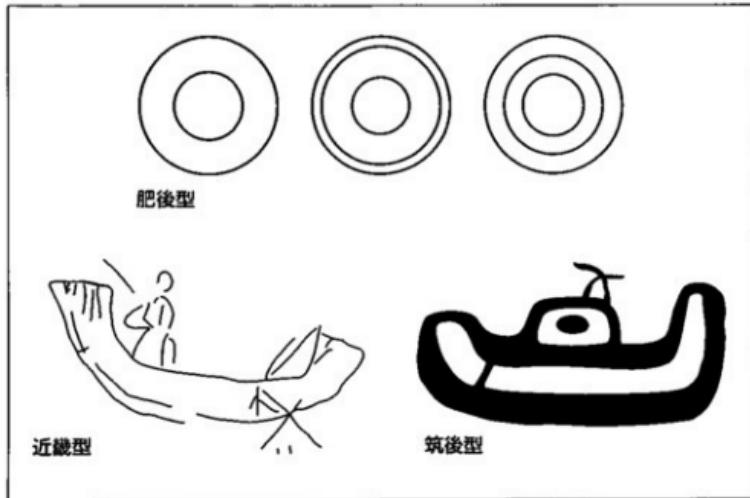
○九州の装飾古墳に三つのタイプ

北九州から中九州、東九州は装飾古墳のもっとも多く分布しているところですが、古墳の造り方、装飾の仕方から次の三つのタイプに分けられます。

筑後型 割石を積んだり巨石を組んで長方形の石室を造り、彩色を主として、人・馬・鞠・盾・幾何学文様などを描いたもので、筑後川流域から菊池川流域を中心として分布しております。

肥後型 割石の小口積みで石室は方形で、円文を中心に鞠や盾などを配したものが多く、県南や天草が中心です。

近畿型 まだ一般的に認められた名称がきまっていますが、近畿一中央勢力の影響下にできたものではないかということで近畿型と呼ぶことにします。横穴式石室や横穴墓に、金釘の先でひっかいたような技法で帆かけ舟とか人物、鳥、木の葉などを自由画風に線刻したもので、福岡県で9例、熊本県で8例、佐賀県で6例、長崎県で6例、宮崎県で4例、大分県で1例が知られています。こんな図柄が生まれたのはなぜか。今後の研究課題です。下図はそれぞれの一例です。(図は講談社刊「日本原始美術5 古墳壁画」によりました。)



○復元を目指して — 横山古墳 —

横山古墳は全長39m、後円部の高さ3m のこじんまりとした前方後円墳です。石室は一辺の長さが3.8m の隅丸方形で、正面には石屋形が設けられています。

装飾文様は、この石屋形の軒縁、袖石、屍床の仕切り石に赤、白、青の顔料で、双脚輪状文や三角文、円文が描かれています。袖石以外の文様の保存状態はよくありません。

遺物は、玉、鉄鏃、刀子、馬具、須恵器等二百数十点が出土しました。この古墳は、昭和44年の発掘調査後に、九州自動車道の新設により壊されました。しかし、その際石材はすべて番号をつけて、保管することにしました。

それから20数年後の今、横山古墳は熊本県立装飾古墳館の新設に併せて、古代の森（鹿央地区）の敷地の一角に移転復元する事が決まり、一般公開の日を待っています。



横山古墳墳丘全景



石室（奥室）状況



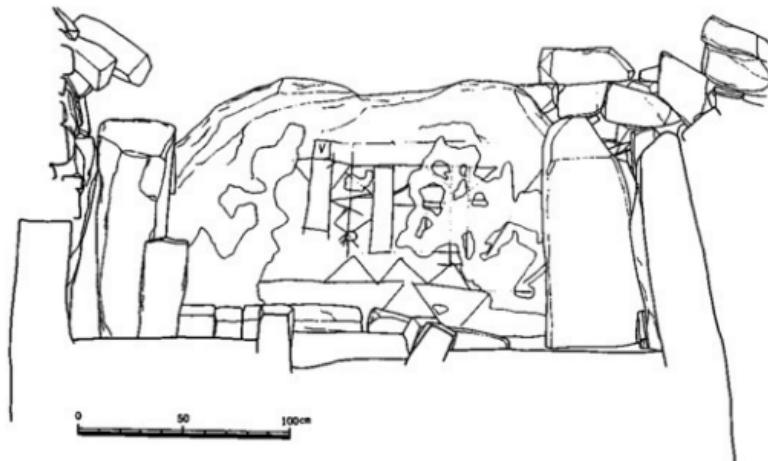
装飾文様の薬品処理作業

○鞆と線刻

— 裂縫尾高塚古墳 —

この古墳は、菊池市裂縫尾にある直径約18m、高さ4mの円墳です。内部に
せんどう
羨道（通路）・前室・玄室（奥室）からなる横穴式石室があって、石室の石屋
形に下図のような線刻があるが何を描いたものかはっきりしません。

下に展示してあるのは、前室の羨門（入口の門）の上にさしわたした凝灰
岩の板石に彫りこんだ鞆（弓矢をいれて背負う道具）です。従来、発見され
た場所が、人の目につきにくい位置であったことと、この石材が、地中に埋
められると思われる下部には朱が施されておらず、元来ある場所に立てられ
るような意図をもって造られていたことなどから、他古墳からの石材の転用
であろうといわれてきました。しかし、視点を変えて、発見場所が羨門の直
上部であることを考えるとき、やはり、奥室内への悪霊の侵入を防ぐため、
最初から当古墳用につくられた鞆と考えた方が、より真実に近いのではない
でしょうか。



裂縫尾高塚古墳石屋形奥壁装飾文（原図 文化財保存計画協会）

○楯形石製品と装飾入の蓋石

—城南町塚原古墳群・北原1号墳—

この楯形石製品は、昭和60年度の塚原古墳群の史跡整備に関する発掘調査時に、北原1号墳の石棺の入り口部近くから発見されたものです。

北原1号墳は、周溝を持たない小円墳で、内部には横口式の家形石棺が埋設されていました。楯形石製品は、長さが88.6cm、最大幅が38.1cmの凝灰岩製で、一見笠の形をしています。表裏に朱が塗られていますが、先細りのした一端には朱が見られないで、本来は墳丘の裾部等に立てられていたのでしょう。

石棺の内部には、沈線による装飾文様が施されています。恐らく、近くにある石の室古墳の、斜格子目文に類似するものと思われます。

また、同町内の牛くび横穴墓で発見された蓋石には、鞆らしきものが沈線で描かれています。蓋石に武具を描くことによって、墓への悪霊の侵入を防いだものでしょうか。



発見直後の楯形石製品

○記録することの大切さ

—久留米藩士 矢野一貞のこと—

江戸時代もおわりに近い嘉永2年（1849）の4月のころ、山鹿の鍋田村の鍋田横穴墓を訪れた一人の旅の武士がいました。武士は、久留米藩士の矢野一貞（守貞）です。横穴墓を興味深く眺めていた一貞は、やおら矢立の筆を取り出し、横穴墓の外壁に浮き彫りされた絵を丁寧に写し始めたのです。

数年後、彼はこの図柄を他の墳墓に関するスケッチ図と共に「筑後將士軍談」（巻之52）という本に収めました。私達はこの残されたスケッチ図から、今は崩壊してなくなった幻の27号横穴墓右壁面の浮き彫りの存在を知ることができたのです。

この図をもとに、現在山鹿市立博物館裏の古代の森（山鹿地区）に27号横穴墓の図柄の複製が出来あがり、見学者の便に供されています。もし、矢野一貞のスケッチ図がなかったなら、私達は永久に27号墓右壁面の図柄の存在を知ることはなかったでしょう。



筑後將士軍談掲載のスケッチ図

○色見本用のパネルの解説

— 京都科学出品 —

当館の装飾古墳室のレプリカは、株式会社「京都科学」が、長い年月の技術の蓄積をもとに製作した作品です。同社は以前、鷺島津製作所の名称で学校の標本・模型を製作してきた会社で、御存知の方も多いと思います。昭和51年に開館した熊本県立美術館の装飾古墳室のレプリカも、(株)京都科学が製作したものです。

製作方法は、装飾古墳の装飾文様を傷めないように文様面に錫箔を張り、上からシリコンを塗り凹凸の型を探り、この型が崩れないようにさらに石膏で裏打ちを造ります。

その後、この型に合成樹脂を流し込み原型を造ります。この型に図面、カラー写真等を参考にして手作業で着色を施していくのですが、作業に携わる人々のほとんどが、芸大・美大出の専門家ばかりです。何度も手直しをしながら、現物と瓜ふたつの作品に仕上げて行くわけですが、その時、活躍するのが色見本用のパネルです。

ここに展示したパネルは、実際に製作に当たる担当者各自が、現地で装飾文様を前にして、自分の目で色を確かめ、現地で自分用につくった色見本です。これをもとにして、各自がレプリカの彩色を開始することになります。

今度、装飾古墳室を一般公開するに当たり、(株)京都科学にお願いして当社のレプリカ製作の熱意と努力の一端を御紹介するため、展示させて頂くことにしました。



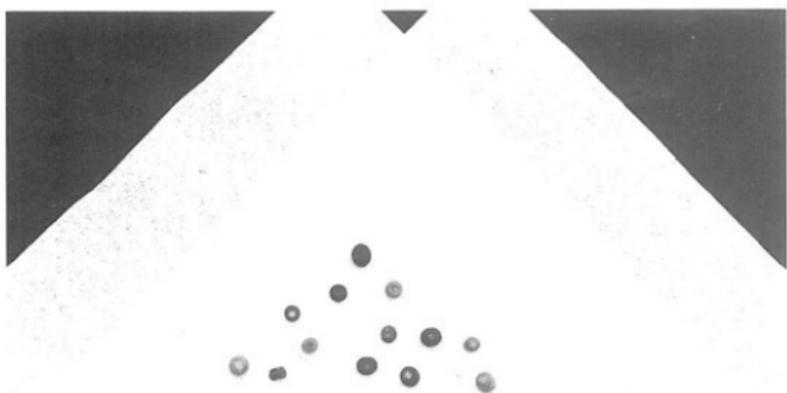
チブサン古墳を製作中の京都科学のスタッフ

関連図版

図版1 出品遺物関連写真



1. 塚坊主古墳の石室部



2. 塚坊主古墳出土の玉類



3. 塚坊主古墳出土の馬具類



4. 塚坊主古墳出土の大刀



5. オブサン古墳の前庭部



6. オブサン古墳の墳形と周溝



7. オブサン古墳：奥室から羨門部をのぞむ



8. オブサン古墳：装飾のある仕切り石



9. 横山古墳：石屋形の保存処理作業



10. 横山古墳：石屋形の解体作業



11. 横山古墳の石屋形の樋包作業



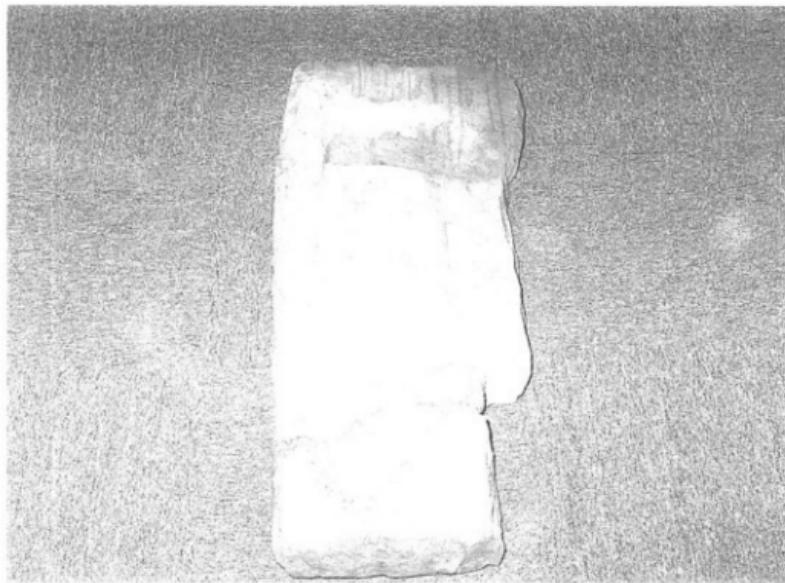
12. 横山古墳の石屋形撤去後の石室



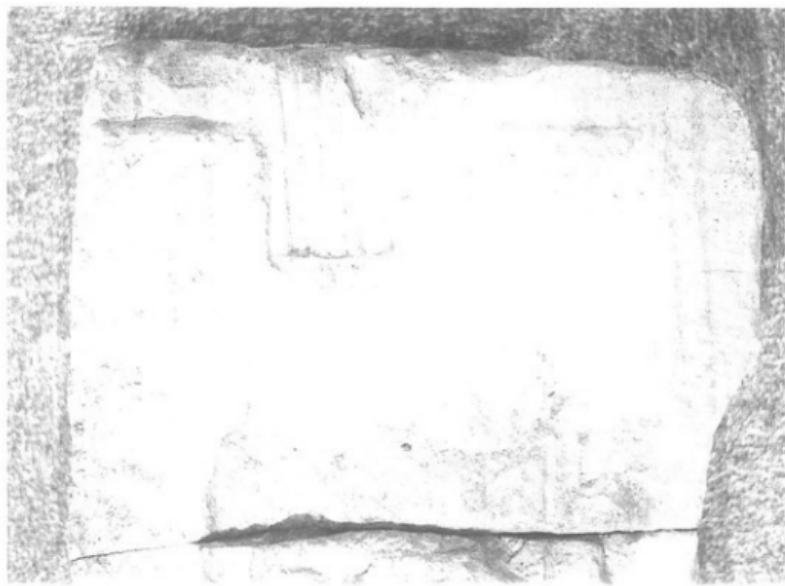
13. 裂袈尾高塚古墳整備前の墳丘の状態（昭和44年）



14. 発見時の駁のレリーフがある石材（昭和53年）



15. 鞄のレリーフを持つ石材全体写真



16. 同上部分拡大写真

装 飾 古 墳

— 蘇る古代・装飾古墳の世界 —

平成6年4月1日発行

五訂版

発行 熊本県立装飾古墳館

〒861-05

熊本県鹿本郡鹿央町大字岩原3085番地

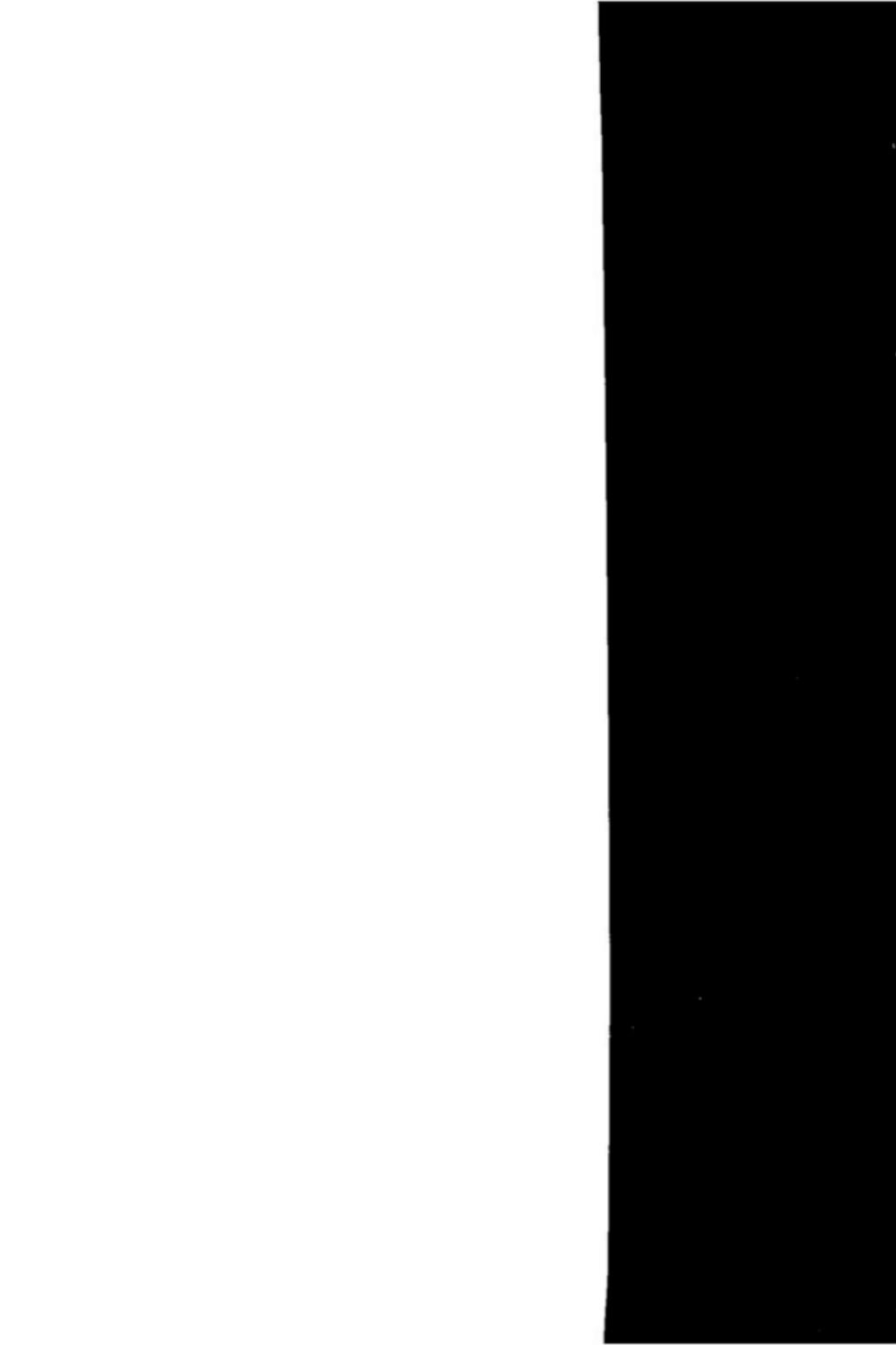
電話 0968-36-2151 (代)

印刷 下田印刷 (本社)

〒869-05

熊本県下益城郡松橋町古保山3511番地

電話 0964-32-3131 (代)



この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第1集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：装飾古墳

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日